



空手道，直接観戦意欲向上に関する研究：空手道の実技回数から考察する

藤本，佳昭

(Citation)

研究紀要：神戸大学附属中等 論集, 7:7-10

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100480898>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100480898>



実践報告

空手道，直接観戦意欲向上に関する研究 —空手道の実技回数から考察する—

A Study on directly contribute to motivation to watch Karate games
-Consider from the number of karate-do classes-

藤本 佳昭

FUJIMOTO Yoshiaki

平成22年文部科学省が掲げたスポーツ政策により，教育現場では「競技普及」を目的として 各種競技団体が企画する学校対象特別プログラムに恵まれている。これらの特別プログラムは，双方のスケジュールの関係から，実施回数が1時間から2時間程度の1回のみの実技体験プログラムが多い。本研究はこの特別プログラムをどのように活かすと，より競技普及の目的を達成できるのかを検証した。そこで，特別プログラムのみを実施したグループ，特別プログラム＋各種競技団体が作成したカリキュラムを保健体育科教員が行ったグループの2グループを作り，空手道を教材として検証した。その結果，特別プログラム＋保健体育科教員による授業実施のグループの方が生徒の観戦意欲が向上したことがわかった。つまり1度きりの特別プログラムよりも，その後バックアップ授業がある方が観戦意欲を向上させる効果、つまり「競技普及」が期待できることがわかった。

In accordance with the sports policy set forth by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in 2010, the educational field has been privileged with special programs organized by various athletic organizations to "promote sports." Due to scheduling issues, many of these special programs are one-time, hands-on programs that last from one to two hours. This study examined how these special programs could be utilized to better achieve the goal of promoting each sports. Two groups were formed, one in which only the special program was implemented, and the other in which the health and physical education teachers implemented the special post-curriculum developed by the athletic organizations in addition to the special program. Karate was used as a teaching material. The results showed that students were more motivated to watch the karate competitions when the special post-curriculum was added. In other words, it was found that post-curricular activities help athletic organizations to better "promote sports."

キーワード： 空手道 実技回数 直接観戦意欲 競技団体主催普及プログラム

Key words: Karate-do Number of classes The motivation to watch the game Promotion program sponsored by sports organizations

I はじめに

学校体育で，技能の指導が重視されると技能的に「できる子」と「できない子」が生まれ，「できない子」は苦手意識や劣等感を感じスポーツから離れてしまう。そのため 新学習指導要領では 従来よりも「多様なスポーツの楽しみ方を共有する」という指針が出された（スポーツ庁ウェブマガジン）。つまり，

「できる」「できない」だけではないスポーツの楽しみ方を子供たちに感じてもらうこと，また「運動が苦手」や「意欲が低い」生徒にも配慮した指導の在り方，授業の改善方法が示されたのだ

2013年9月，東京で第32回夏季オリンピックが開かれることが決定したことや 新学習指導要領の指針を受け，さらに，新学習指導要領が提示している

「する・みる・支える・知る」の「みる」に着目した研究はあまりみられないため、本研究は「みる」に着目した。この研究を通して、スポーツの楽しみ方の幅を広めることができるのではないかと期待する。

対象スポーツは、2020 東京オリンピック初めてプログラムに加わった、空手道を選んだ。空手道は、授業中の怪我の発生率が低いこともあり、今後、武道の授業にて、ますます行われていくと考えるからだ。

文部科学省は、平成22年8月に今後の我が国のスポーツ政策の基本的方向性を示す「スポーツ立国戦略」を策定した。本戦略では、「スポーツ立国戦略の目指す姿」を実現するため、「1.人（する人、観る人、支える（育てる）人）の重視」「2.連携・協働の推進」を基本的な考え方としている。「2.連携・協働の推進」の1つとして、スポーツを普及・定着させ、スポーツを人々にとって身近なものとするためには、地域スポーツクラブ、学校、地方公共団体、スポーツ団体、企業などが組織の違いを超えて連携することにより、トップスポーツと地域スポーツの垣根をなくし、人材の好循環を生み出すことが必要であると述べている。このような背景より、昨今競技普及を目的として、教育現場を対象とした、各種競技団体が企画する学校対象特別プログラム（以下特別プログラムと称する）などが提供されている。この特別プログラムは、双方のスケジュールの関係から、1回（時間：1時間～2時間）のことが多い。

提供される特別プログラムは、大変な盛り上がりを見せる。受講時の生徒の表情は、笑顔に包まれており、事後に記載する感想文を見ても「楽しかった」「またプレーしてみたい」などの記述がみられることが殆どである。

特別プログラムの興奮をそのまま保管することが、そのスポーツが、生徒にとって生涯にわたって親しむスポーツとなるのか、それともその後に、保健体育科教員が、各種競技団体が推奨するプログラムで授業を継続して行った方が、生徒にとって生涯にわたって親しむスポーツになるのか、という悩みを抱いた教員は多いのではないだろうか。

各種競技団体が提案する授業計画は、その競技ならではの魅力が詰まっており、保健体育科教員に新たな気付きなどを与えてくれている。

生徒の観戦意欲を高める活動を明らかにすることは、各種競技団体が、特別プログラム実施に加えて、授業プログラムを提案することが、観客増加に、繋がるということを明らかにすることとなる。このことは、各種競技団体への教育現場からの情報還元となるものと考ええる。

II 本研究の目的

本研究は、空手道の訪問授業内容を実施した際に、1時間のプログラムのみを実施した場合と、1時間のプログラムの後に集団で型の授業（「中学校体育実技指導資料 空手道指導の手引」学習指導の展開を参考に計画）を5回実施した場合で、直接観戦意欲の変化を明らかにすることを目的とする。

はじめに述べた理由により、競技団体が支援している授業は、1回（1時間～2時間）のことが多い。そのプログラムが、直接観戦するという行動に対して与えた影響について直接観戦意欲の手法を用いて明らかにする。

ゲストティーチャーを招いて第1回の授業を実施する予定であったが、コロナ禍の影響により、学校外人材を校内に入校を許可することができなかったため、本校の保健体育科の教員である私が、空手道の特別プログラムを実施することで代替とした。

III 本研究の方法

中等教育学校生徒（中2相当118名）を2グループ（60名、58名）に分けた。両グループについて、空手道の授業実施前に、質問紙調査を実施した。

Aグループは、1時間の空手道の特別プログラムを実施した後に、事後の質問紙調査を行った。Bグループについては、1時間の空手道の特別プログラムを実施した後に、形（集団）の授業を5時間実施、合計6時間の空手道の授業を行った後に、事後の質問紙調査を行った。その2つのグループについて、支払意思額の変化の差を考察する。

アンケートは、仮想市場法（CVM）、対価として支払ってもよいと考える額（支払意思額、WTP）をもって評価する方法（環境政策・公共政策でよく用いられ

る)を参考に作成した。オリンピックの開催地である東京までの交通費については考慮せず、チケット価格(2019年1月30日に発表された、空手競技大会の観戦チケット価格(D席 3,500円)を基準に設定)について調査を行うこととした。

授業については、以下の内容にて実施した。
(全日本空手道連盟、空手道授業支援パッケージを参考にして計画)

【授業前】 事前アンケート

【1 時間目】 空手道の訪問授業内容プログラム

空手道について（三礼について等）

立ち方, 受け, 突き, 移動について

約束組手（距離を取って）

新聞紙を用いた突き

【2 時間目～5 時間目】

基本動作の確認（立ち方、受け、突き、移動）

型の学習 (基本型 I)

基本型 I (グループ) の視聴

グループ練習

【6 時間目】

審判基準について

型の学習発表（基本型Ⅰ）

【授業後】 事後アンケート

教科外での活動

2021.7.13 応援メッセージの出演生徒募集

2021.7.19 撮影 (参加生徒 26 名)

(出演者は、撮影にあたり出演同意書を提出)

IV 結果と考察

体験前後を比較すると、2グループとも、観戦に行きたいという選択をした生徒数が増加した。

Bグループについては、58名中8名が「行かない」から「行く」に意思を変更させた。また授業前では、予選のチケット代金として支払っても良いと考える金額が3,100円であったものが授業後では、3,319円に増加（前後比107%）しており、支払意思額の向上が見られた。

A グループについては、60 名中 2 名が「行かない」から「行く」に意思を変更させた。また授業前では、予選のチケット代金として支払っても良いと考える金額が 3,733 円であったものが授業後では、3,671 円に減少（前後比 98.4%）しており、支払意思額の低下が見られた。このことは、「行かない」から「行く」に意思を変更させた生徒の支払い意思額が、平均を下回るものであったことと、「行く」という行動を選択した生徒が、授業後に支払い意思額を大幅に増加させなかったことが考えられる。（表 1）

表1 授業回数別支払い意思額（授業前後）

		6回実施	1回実施	計
	授業前	3,100.0	3,732.7	3,404.6
	授業後	3,319.4	3,671.4	3,473.4
	差額	219.4	-61.3	68.8
	前後比	107.1%	98.4%	102.0%
行く	体験前人数	28	26	54
行く	体験後人数	36	28	64
行かない	体験前人数	30	34	64
行かない	体験後人数	22	30	52
	体験後無回答	0	2	2

このことから、直接観戦意欲向上には、1 回実施の実技体験授業のみよりも、1 回実施の実技体験授業に継続して、授業を継続して実施した方が、直接観戦意欲向上には、効果が期待することができる。自由記述の記入内容から、空手道の授業回数を重ねることで、「奥深さ」「迫力」「深まる」といった 1 回の実技体験授業では、出現しなかった言葉が出現していることから、授業回数を重ねることが生徒に、空手道に対する興味・関心を高め、そのことが直接観戦意欲向上に寄与したことが考えられる。(図 1)

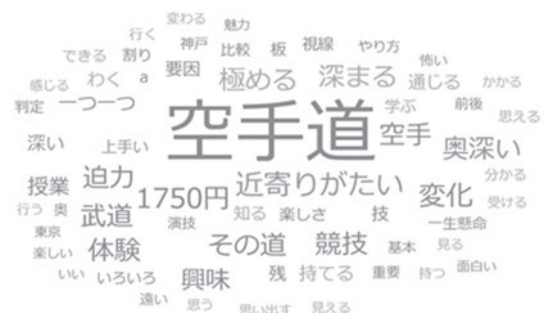


図1 授業6回実施後自由記述28人，合計866字

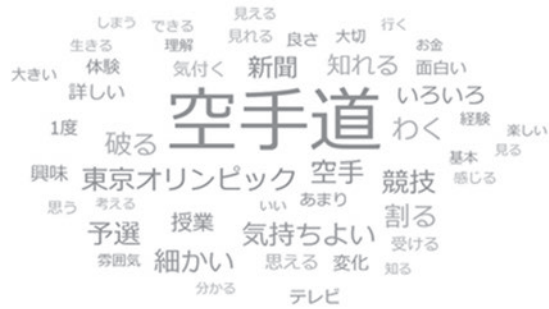


図2 授業1回実施後自由記述15人、合計345字

Aグループが、直接観戦意欲向上に繋がらなかった理由として、直接観戦しようとするまでの興味・関心を育む体験をすることが出来なかったことが考えられる。見に行かないと回答した生徒は、“あまり詳しくないから行かない”ということであった。また、Aグループの自由記述は、Bグループと比べると、記述が少なかった。Aグループの授業について、授業者（教員）は、生徒が大変盛り上がり、楽しんでいる印象を受けていただけに、この結果は、授業の感触から得た予想とは異なっていた。生徒にとっては、楽しかったが直接観戦しようと思うまでの、興味・関心を育むまでには至らなかったものとする。生徒間での教え合い、発表会という場での、競い合いなど、競技としての体験がないことが、この結果に影響していると考えられる。

特別プログラムを実施した後に、グループを組んで、形を生徒間で教え合ったこと、発表会として、簡単な競技ルールを提示した上で、審判を生徒自らがを行い、競い合ったこと。こういった活動が、生徒に、国を代表する選手のプレーを直接会場に行き観戦してみたいという気持ちにさせたことが考えられる。

これらのことから、特別プログラムに継続して、今回実施したような協働を伴う授業を実施することで、特別プログラムを1回実施するだけよりも、直接観戦意欲を向上させる効果を生むことが示唆された。

授業前に、空手道を直接観戦に行かないと答えた生徒は、64名から52名と12名減となったが、約半数弱の52名が、授業終了後にも「行かない」と回答していることから、学校の授業の影響は、受講した全生徒に直接観戦するという行動を選択させるまでは、

難しいことも明らかとなった。複数述べられていたのが、“テレビで見られると思ってしまう。”という記述であった。映像で観ることも競技を観る楽しみ方であるため、この観点については、今後更なる研究が必要である。

また、本研究では、教員が、空手道の指導歴が、浅く技量が、未熟であること、また実施人数が少ないため、今後、データの蓄積が必要である。また、他のスポーツや間接観戦との比較も必要である。以上を今後の課題としたい。

非表示

写真 ニュージーランド代表への応援動画

謝 辞

本調査にあたってご協力くださった本校生徒の皆様は心より感謝申し上げます。

文 献

栗原茂夫 (2015). 「中学校体育実技指導資料 空手道指導の手引き」 日本武道館, 全日本空手道連盟.

文部科学省 (2017.7). 『中学校学習指導要領 (H29 告示) 解説保健体育編』.

文部科学省 (2010). 「スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン—」.

https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm.

2023年2月22日.

藤本佳昭, 内田紗那 (2021). 「パラリンピック競技体験は、直接観戦意欲向上に寄与するのか—ボッチャの実技体験・esports体験から考察する—」. 『研究紀要 神戸大学附属中等論集』, 5, 69-71.